

平成30年6月15日

学位（博士・言語教育学）申請論文 審査報告書

〈学位申請者〉 氏名 畢 文涛 学生番号 2D503

〈論文題名〉 日本語における「ほめ」表現に関する通時的研究

〈審査委員〉

主査 外国語学部教授 阿久津 智

副査 外国語学部教授 佐野 正俊

副査 東洋大学文学部教授 木村 一

I. 論文の主旨

本論文は、文献資料から採集した、古代から近現代に至るまでの、日本語における「ほめ」表現について分析・考察を行い、「ほめ」表現の様相を通時的に明らかにすることを目指した研究である。「ほめ」に関する先行研究では、現代語の話し言葉における「ほめ」表現が主な対象とされているが、本論文は、上代から近現代までの文献に現れた「ほめ」表現を対象とし、「ほめ」表現の通時的变化を探ろうと試みている。

本研究で調査対象とした文献資料は、上代～近世については『新編日本古典文学全集』（JapanKnowledge 版）収録の作品、近現代については『青空文庫』収録の作品である（ともに電子化され、ウェブ上で閲覧できる）。調査方法は、それぞれのサイトで、「とほめ」、「と褒め」、「と誉め」、「ほめ」、「褒め」、「誉め」、「称め」、「賞め」などの検索語句を用いて、「全文検索」して用例を抽出し、各用例について分析・考察するという方法をとっている。抽出された用例数は、前者が 361 例、後者が 370 例の、計 731 例である。これらについて、(1)「ほめ」表現の形式、(2)「ほめ」における人間関係、(3)「ほめ」の対象、(4)「ほめ」に対する返答、の 4 つの観点から、時代別に（「ほめ」の返答以外は、男女別にも）分析・考察を行っている。

調査分析の結果は、全体として、(1)「ほめ」表現の形式については、「肯定的評価語」（「よし、うつくし、あつぱれ」など）を用いるものが多い、(2)「ほめ」における人間関係については、上の者から下の者への「ほめ」が多い、(3)「ほめ」の対象については、「能力」と「行動・態度」が多い、(4)「ほめ」に対する返答については、「否定的返答」が多い、となった。これは、先行研究で扱われている現代語の話し言葉に近いものであるが、時代別や男女別に見ると、たとえば、特に古代～中世において、下の者から上の者への「ほめ」も多く見られ、この場合、女性がほめ手になることが多いなどといった特徴的な様相も見られた。

II. 論文の構成

本論文の構成は以下の通りである。

第 1 章 序論

1. 1 研究の背景
1. 2 研究の目的

第 2 章 先行研究

2. 1 「ほめ」に関する主な研究
2. 2 「ほめ」の定義に関する先行研究
2. 3 「ほめ」の分類に関する先行研究

- 2. 4 「ほめ」の機能に関する先行研究
- 2. 5 「ほめ」とポライトネスに関する先行研究
- 2. 6 先行研究から見た課題

第3章 「ほめ」に関する調査の概要

- 3. 1 調査の目的
- 3. 2 調査の対象
- 3. 3 調査の方法

第4章 「ほめ」に関する調査の結果

- 4. 1 結果の概要
- 4. 2 用例の分析
 - 4. 2. 1 奈良時代の用例
 - 4. 2. 2 平安時代の用例
 - 4. 2. 3 鎌倉時代の用例
 - 4. 2. 4 室町時代の用例
 - 4. 2. 5 江戸時代の用例
 - 4. 2. 6 明治時代の用例
 - 4. 2. 7 大正時代の用例
 - 4. 2. 8 昭和時代の用例

第5章 「ほめ」に関する考察

- 5. 1 「ほめ」の表現
 - 5. 1. 1 「ほめ」の表現の分類基準
 - 5. 1. 2 資料に現れた「ほめ」の表現
 - 5. 1. 3 「ほめ」の表現の分類結果
 - 5. 1. 4 「ほめ」の表現に関する考察
- 5. 2 「ほめ」の人間関係
 - 5. 2. 1 「ほめ」の人間関係の分類基準
 - 5. 2. 2 資料に現れた「ほめ」の人間関係
 - 5. 2. 3 「ほめ」の人間関係の分類結果
 - 5. 2. 4 「ほめ」の人間関係に関する考察
- 5. 3 「ほめ」の対象
 - 5. 3. 1 「ほめ」の対象の分類基準
 - 5. 3. 2 資料に現れた「ほめ」の対象
 - 5. 3. 3 「ほめ」の対象の分類結果

- 5. 3. 4 「ほめ」の対象に関する考察
- 5. 4 「ほめ」に対する返答
 - 5. 4. 1 「ほめ」に対する返答の分類基準
 - 5. 4. 2 資料に現れた「ほめ」に対する返答
 - 5. 4. 3 「ほめ」に対する返答の分類結果
 - 5. 4. 4 「ほめ」に対する返答に関する考察

第6章 結論

- 6. 1 調査結果・分析・考察のまとめ
- 6. 2 「ほめ」に関する結論
- 6. 3 今後の課題

参考引用文献

謝辞

参考資料 I

参考資料 II

Ⅲ. 本論文の概要

第1章 序論

本章では、研究の背景と目的について述べている。

まず、研究の背景として、先行研究の知見と日本語学習上の問題点とを述べ、「ほめ」について、円滑な人間関係を構築、維持するもので、あらゆる言語の中に存在している重要な社会言語現象であり、感謝、謝罪、依頼表現などと同じように日常生活の中で、頻繁に使われている言語表現の一つである、としている。

次に、研究の目的について、古代から近現代までの日本語における「ほめ」表現を分析・考察し、「ほめ」表現の様相を通時的に明らかにすることを目的とする、と述べている。

第2章 先行研究

本章では、まず、「ほめ」についての先行研究をまとめ、「ほめ」の定義、分類、機能、ポライトネスに関する研究について、それぞれ細かく見たうえで、先行研究から見た課題について述べている。

「ほめ」の定義について、本論文では、「『ほめ』は、話し手が聞き手を心地よくさせるために、聞き手に関わる人、物、ことなどに対して、明示的または暗示的に評価する言語行動である」としている。

先行研究から見た課題として、先行研究により、現代語における「ほめ」についてはか

なり明らかにされているが、現代語以外のものについては、あまり研究が行われていないため、古代から近現代までの日本語における「ほめ」について、「『ほめ』表現の様相を通時的に明らかにし、『ほめ』の時代的な変化を探りたい」としている。

第3章 「ほめ」に関する調査の概要

本章では、調査の目的、対象、方法について述べている。

調査の目的については、「特に、古代から近現代までの『ほめ』と現代の話し言葉の『ほめ』とを比べることで、『ほめ』の時代的な変化を探りたい」としている。

調査の対象については、『新編日本古典文学全集』、『青空文庫』収録の作品を資料に、その中に現れる「ほめ」表現をデータとし、時代を、①古代（奈良・平安時代）、②中世（鎌倉・南北朝・室町時代）、③近世（安土桃山・江戸時代）、④近現代（明治以降）の4つに区分している。

調査の方法については、『新編日本古典文学全集』（JapanKnowledge を利用）、及び『青空文庫』で、「とほめ」、「と褒め」、「と誉め」、「ほめ」、「褒め」、「誉め」、「称め」、「賞め」などの検索語句を用いて、「全文検索」して、用例を抽出するという方法をとる、としている。

第4章 「ほめ」に関する調査の結果

本章では、まず採集された用例数を挙げ、次に用例の分析例を、時代（奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代、江戸時代、明治時代、大正時代、昭和時代）ごとに挙げている。

『新編日本古典文学全集』からは 361 の用例が、『青空文庫』からは 370 の用例が採集され、両資料から計 731 の「ほめ」表現の用例が採集された、としている。

第5章 「ほめ」に関する考察

本章では、採集した「ほめ」の用例について、表現、人間関係、対象、返答の4つの面から分析を行っている。

5.1 「ほめ」の表現

本節では、「ほめ」の表現について、まず各時代における主な「ほめ」の表現を挙げ、続いて、金庚芬『日本語と韓国語の「ほめ」に関する対象研究』（2012）の分類を借り、その形式を、①肯定的評価語（「かわいい、すごい、さすが、きれいだ」など）のみ使用、②肯定的評価語の使用+他の情報、③肯定的評価語の不使用、の3つに分類して、時代区分別・男女別に分析している（対象数 369 例）。

その結果、ほめ手の性別に関わらず、「肯定的評価語」を用いることで「ほめ」を行う場合が多い、としている。金（2012）の現代語会話の分析結果では、「肯定的評価語のみ使

用」は女性に多く、「肯定的評価語の使用+他の情報」は男性に多く、「肯定的評価語の不
使用」は男女ともに少ないとなっているが、本調査の分析結果では、「肯定的評価語のみ使
用」の割合は、古代～中世で男性が高く（金 2012 と不一致）、近世～近現代で女性が高く
（金 2012 と一致）、「肯定的評価語の使用+他の情報」の割合は、古代～近世で女性が高く
（金 2012 と不一致）、近現代で男性が高く（金 2012 と一致）、「肯定的評価語の不使用」
の割合は、近現代で女性がやや高い（古代～近世は用例が少ない）、としている。

5. 2 「ほめ」の人間関係

本節では、「ほめ」表現における人間関係について、古川由里子「書き言葉データにおけ
る〈対者ほめ〉の特徴」（2003）の対人関係の「分類標準」に従い、人間関係を、上下（上
の者から下の者へと行われる「ほめ」）、対等、下上（下の者から上の者へと行われる「ほ
め」）に分け、時代区分別・男女別に分析を行っている（対象数 468 例）。

その結果、時代やほめ手の性別に関わらず、上下「ほめ」が最も多い、としている。古
川（2003）の現代書き言葉の分析結果では、「ほめ」は、上から下へ行われる場合が多く、
対等の間でもかなり行われているとされるが、本調査の分析結果では、上下「ほめ」が行
われる場合が多いが（古川 2003 と一致）、下上「ほめ」も（特に古代～中世に）多く見ら
れ（古川 2003 と不一致）、対等「ほめ」は使用が少ない（古川 2003 と不一致）、としてい
る。時代区分別・男女別に見ると、上下「ほめ」については、古代から近現代まで、男性
がほめることがやや多く、女性がほめられることがやや多く（中世・近現代では、同性間
の「ほめ」もやや多い）、対等「ほめ」については、近世～近現代においては、男性がほめ
ることが多く、女性がほめられることが多く、下上「ほめ」については、古代・近現代で
は、女性がほめることが多く、男性がほめられることが多い（近現代では、同性間の「ほ
め」もやや多い）、としている。

5. 3 「ほめ」の対象

本節では、「ほめ」の表現において、何についてほめが行われるかについて、Holmes, J
「Paying Compliments」（1988）、丸山明代「男と女とほめ」（1996）、大野敬代「人間関
係からみた『ほめ』とその工夫について」（2003）、古川（2003）、金（2012）を参考に、
「ほめ」の対象を、①所持物、②外見、③能力、④性格・人柄、⑤行動・態度、⑥状態の
6 つに分類して、時代区分別・男女別・「ほめ」の表現形式別に分析を行っている（対象数
667 例）。

その結果、時代やほめ手の性別に関わらず、「能力」について「ほめ」を行う場合が多い、
としている（例数の多い順に、③能力、⑤行動・態度、①所持物、④性格・人柄、②外見、
⑥状態）。先行研究では、①「所持物」については、「ほめ」の対象として頻度が低く、女
性が多くほめ、評価語を多く用いる、②「外見」については、女性が多くほめ、評価語の
みを用いる、③「能力」については、「ほめ」の対象として頻度が高く、男性が多くほめ、

評価語のみを用いることが多い、④「性格・人柄」については、「ほめ」の対象としてあまり現れない、⑤「行動・態度」については、「ほめ」の対象として頻度が高く、男性が多くほめ、評価語を多く用いる、とされ、⑥「状態」については、明確な結果が出されていない、としている。本調査の分析結果では、①「所持物」については、例数がやや多く（先行研究と不一致）、古代・近世で男性が多くほめ（先行研究と不一致）、近現代で女性が多くほめ（先行研究と一致）、古代・近世・近現代で評価語不使用の割合が高い（先行研究と不一致）、②「外見」については、古代で女性が多くほめ（先行研究と一致）、近世～近現代で男性が多くほめ（先行研究と不一致）、古代～中世で「評価語+他の情報」の使用が見られ（先行研究と不一致）、近世～近現代で評価語不使用が現れている（先行研究と不一致）、③「能力」については、例数が最も多く、古代・近現代で男性が多くほめ、特に近世～近現代で評価語のみ使用の割合が高い（以上、先行研究と一致）、④「性格・人柄」については、例数がやや多く（先行研究と不一致）、例数の少ない中世を除き、女性がやや多くほめ、評価語のみ使用の割合が高い、⑤「行動・態度」については、「能力」に次いで例数が高く、中世～近現代で男子が多くほめ、評価語使用の割合が高い（以上、先行研究と一致）、⑥「状態」については、近世～近現代で男子が多くほめ、例数の少ない中世を除き、評価語使用の割合が高い、としている。

5. 4 「ほめ」の返答

本節では、「ほめ」の返答について、横田淳子「ほめられた時の返答における母国語からの社会言語学的転移」（1985）の分類を借り、「ほめ」表現に対する返答を、「A 肯定的返答」、「B 否定的返答」、「C 回避的返答」の3つに分類して、時代区分別・「ほめ」の表現形式別に分析している（対象数 62 例）。

その結果、古代～近世は用例が極めて少ないものの、全体として、「B 否定的返答」を行う場合が多く、「C 回避的返答」は少ない、としている。近現代については、上下「ほめ」（返答は、下から上）と対等「ほめ」において、「B 否定的返答」の割合が高く、「C 回避的返答」は、例数は少ないものの、すべて上下「ほめ」に対する返答（下から上）になっている、としている。

第6章 結論

本章では、本論文の調査結果・分析・考察についてまとめ、結論を述べ、さらに、今後の課題について述べている。

以上が本論文の構成である。

IV. 論文の総合評価

論文提出までの経緯

学位申請者は、2012年4月に本学言語教育研究科博士後期課程言語教育学専攻に入学し、修了に必要な10単位以上を取得、外国語（日本語）検定試験にも合格し、2018年3月に博士論文を提出の上、同課程を満期退学している。

博士論文完成発表会は、2016年12月24日に実施され、論文は2018年3月29日に受理されている。論文提出時の業績は、博士論文中間発表会、『拓殖大学言語教育研究』、及び学外の研究会誌における発表を含め、計6本となる。

論文の審査結果

審査委員による論文審査会を2018年5月29日に行い、審議の結果、全員一致で「合格」とし、続いて、最終試験（口述試験）を2018年6月12日に実施し、審議の結果、全員一致で「合格」と判定した。

V. 審査所見

本論文は、日本語における「ほめ」表現について、古代から近現代に至るまでの文献資料を用いて、各時代における様相、及び通時的な変化を探ったものである。

「ほめ」表現に関する研究は、これまで、主に現代語の話し言葉を対象に行われてきた。これには、「ほめ」が言語行為（発話内行為）の1つであり、話し手と聞き手との関係や状況に関わって行われるものであるため、それがはっきりわかる現代語の話し言葉が分析対象として適当だということがあると思われる。その一方で、人間関係や使用状況、具体的なやりとりなどが書き言葉（文献資料）からは探りにくいということから、古い時代における「ほめ」表現の様相や、「ほめ」表現の時代的な変化などに関する研究は、ほとんど行われてこなかったようである。この点から見て、「ほめ」表現を通時的に探ることを試みている本論文は、「ほめ」という言語行為に関する新しい観点からの研究と位置づけられ、文献資料ゆえの制約はあるものの、古代から近現代までの文献資料から広く用例を抽出し、それらを細かく分析して、「ほめ」表現の通時的様相の一端を示したという点において評価できる。

本研究は、電子化された『新編日本古典文学全集』（古代～近世）と『青空文庫』（近現代）とに収録された全作品について、「ほめ」を含む検索語句を用いて「全文検索」を行うことによって、広く用例を集め（抽出された用例は全731例）、その1つ1つについて、どのような表現を使っているか、だれがだれをほめているか（その人間関係はどうなっているか）、何をほめているか、「ほめ」に対してどう返答しているか、などについて詳しく分析している（その分析結果については、「参考資料」として一覧表になっている）。「ほめ」に関して、このような量的な研究は、これまでに行われておらず、本研究によって、「ほめ」の時代差、古代から近現代までの「ほめ」の様相などが、いくぶんなりとも明らかにされ

たのではないかと思われる。たとえば、人間関係については、現代語では、上の者が下の者をほめることが多く、これは古い時代でも同様であるが、また一方で、(特に古代～中世において) 下の者が上の者をほめる例も多く見られ、この場合、(特に古代において) 女性がほめ手になることが多く、男性がほめられ手になることが多いという調査結果が示されている。また、「ほめ」に対する返答について、(文献資料には、特に古代～近世において、「ほめ」に対する返答が現れていないものも多く、あっても部分的なものが多いという制約はあるものの) 全体として、肯定的な返答に比べて、否定的な返答が多いという結果になっている。このような結果は、ポライトネス理論の観点から、日本語における「ほめ」の特徴(旧来型)として挙げられる、「目上を褒めてはならない」、「目上から褒められたら『いえ、私などとても…』』と言って打ち消す」などという「ネガティブ・ポライトネス的な暗黙のルール」や、また、近年見られる、「目上を褒める」、「褒めをそのまま受け入れる」などといった「ネガティブ・ポライトネスからポジティブ・ポライトネスへという変化」(滝浦真人・大橋理枝『日本語とコミュニケーション』)などに照らしても興味深いものとなっている。ただし、本論文においては、このような観点から見た、「ほめ」の通時的な流れについては触れられていないため、今後のさらなる(質的な)研究が期待される。

本研究の問題点としては、文献資料の限界への考慮がやや足りない(先行研究における現代の話し言葉に対するやり方をそのまま用いていいのか、異なるジャンルのもを一律に扱っていいのか、などについての検討などがされていない)ことや、分析・考察において、特に重要な点や大きな流れが示されず、散漫な印象を受けることなどが挙げられる。また、「ほめ」の定義がやや曖昧な点も気になる。本研究では、「ほめ」を、先行研究に基づいて、「話し手が聞き手を心地よくさせるために、聞き手に関わる人、物、ことなどに対して、明示的または暗示的に評価する言語行動である」と定義している(第2章)。しかし、実際の用例採集では、各文献において「ほめ」という語で示された表現を「ほめ」の用例と認めており、これは、上の定義よりその範囲が広がっていると思われる(採集された用例には、第三者に対するものや、「祝福」を表すものなど、上の定義に照らして、「ほめ」と認めうるかが微妙なものも含まれる)。一方で、『ほめる』という動詞は、目上の人に対しては用いることができない(『大辞林』(第三版))という見方などもあり、「ほめ」の定義次第で、調査範囲や調査結果が変わってくることを考えると、「ほめ」の定義をきちんと行って、用例採集の範囲を明確にしておく必要があると思われる。

以上述べてきたように、本論文は、「大学院学位論文審査基準」(「博士論文審査基準」)に照らして、①研究テーマ、②先行研究・文献資料・調査などの情報収集、③研究方法、のいずれにおいても、おおむね適切・妥当であり、④論旨もおおむね妥当であると認められる。特に、②・③に関して、文献資料(用例)の調査結果が「参考資料」として一覧で示され、すべての用例について、どのような分析が行われたかを確認することができる(たとえ、分析に誤りがあったとしても、それを確かめうる)点は、本論文が科学的(実証的)な研究であること保証するものとなっている。

⑤全体の構成、言語表現については、大きな問題はなく、「論文」としての体裁が整っているものと判断する。

⑥論文の内容について、独創性を有すること、当該学問分野の研究に幾ばくかの貢献をなすものであることは、上に述べたとおりである。また、学位申請者は、長く日本語教育、中国語教育に携わってきており、2017年3月からは、北京語言大学東京校で常勤講師（専任）として、中国語を教えている。これらのことから、当委員会は、学位申請者には、高等教育機関で自立した教育者・研究者として活躍していく能力及び学識が備わっているものと認める。

VI. 審査委員会結論

以上により、本審査委員会は、慎重・厳重な審査の結果、総合的に判断し、3委員全員が一致して、学位申請者に対し、学位「博士（言語教育学）」を授与することに同意するものである。